

言語グローバル化進まぬ日本

耳から学ぶ習慣を

国際教養大学長

中嶋嶺雄



なかじま・みねお 36年、松本市生まれ。東京大大学院修了。東京外国語大学長などを経て、現職。専門は国際社会学。著書に『北京烈烈』『国際関係論』『21世紀の大学』など。

空路ではわずか二、三時間、欧米からすれば見分けが難しい日本・韓国・中国といった東アジアの近隣の人々の間にあっても、使用される言語は全く異なっていて、それを学ばなければ十分なコミュニケーションができない。

一方、いまや国際語ないしは普通語となっている英語をツール(道具)にすれば、ITの進化もあって、東アジア域内はもとより、全地球規模でも即座にコミュニケーションが可能になる。

このような現実を考える

と、グローバルな言語としての英語のポジションはもはや争う余地がないのであって、国民の英語力がGDP(国内総生産)などの数値と並んで、国力の比較指標になる時期がやがてくるだろう。

中国、台湾、韓国など東アジアの近隣地域のみならず、東南アジアなどの非英語圏諸国でも、グローバル化の時代に英語力をどう高めるかについて、真剣な検討や取り組みがなされている。私はこの夏、タイのバンコクで開かれた国際会議の基調講演に招か

れたが、会議のテーマは「グローバル文化のなかでの言語ブリッジかバリアか？」というものであった。作家の水村美苗さんが文芸誌「新潮」九月号に発表した論考「日本語が亡びるときー英語の世紀の中で」も、この問題に鋭く迫っていた。

さて、わが国では小学校への英語教育導入をめぐる、英語よりも国語をとか、英語をやると日本語がダメになるといった議論が依然としてあるようだ。しかし、オセロなどのゼロ・サムゲームのよう

に母語か英語か、といった議論の段階にもはやとどまっていはならない。

そこにとどまっていたは、これからのグローバル化の時代に、わが国の若者や子どもたちを、常に英語コンプレックスに落ち込ませてしまいかねないからである。

言語や文化の共通項が多いとはいえ、欧州連合(EU)では最近、複数の外国語の習得が相互に刺激しあって個々の言語空間を広げ、母語の学習にも効果的影響をもたらすという「複言語主義(multilingualism)」が唱えられている。多文化共生のための言語政策であるが、わが国においても、より早い時期からのコミュニケーション中心の外国語学習が広く国民全体に求められるべきである。さらに高等教育の段階では、母語と英語とも一つの外国語によって知的世界をさらに広げる「複言語主義」教育が必要ではないか。

やはりわが国においては、問題は旧来の英語教育の在り方にあるのであって、そこを抜本的に改革しない限り、英語を習っても英語を話せないという悪循環からいつまでたっても解き放たれないであろう。小学校の英語教育が2011年度から導入されることになった今日、一つの方法として、幼児からの音楽教育で世界に広がっている鈴木鎮一の才能教育の方法(スズキ・メソッド)は、ぜひ参照されるべきであろう。

その核心は、頭脳の柔らかい幼児のうちからクラシック音楽を耳から聴いて覚え、繰り返し練習することにある。楽譜からは入らないこの方法は、文法やスペル(綴り)から入るのではなく、耳で聞いて覚えて話すというコミュニケーション能力をまず最初に教える方法として、外国語教育にも十分応用できるものだと私は考えている。